

いわさき ちひろ ピエゾグラフ展



「ちら ちら こゆき」1958年

展覧会名	いわさきちひろ ピエゾグラフ 展
会 期	2021年1月30日(土)～3月14日(日)
休館日	月曜日(祝日の場合は翌日)
時 間	午前9時～午後5時(最終入館は午後4時30分まで)
料 金	一般700円、高校生350円、中学生以下無料 ※大学生・専門学生は一般料金となります ※障害者手帳をお持ちの方、およびその介助者1名の観覧料は半額となります ※当面の間、団体でのご来館はお控えください
主 催	公益財団法人 酒田市美術館、ちひろ美術館
共 催	酒田市、酒田市教育委員会
本資料に関する 問い合わせ	酒田市美術館 学芸員:武内治子 TEL0234-31-0095 FAX0234-31-0094

展覧会概要

生涯にわたって子どもを描き続けた画家・いわさきちひろ（1918-1974）。

大正から昭和にかけての激動の時代を生きたちひろは、戦後、絵本や絵雑誌、教科書などの印刷美術の世界で活躍しました。

「母性の画家」とも呼ばれたちひろは、母親ならではの観察力と、卓越したデッサン力を駆使し、モデルなしで10ヶ月と1歳のあかちゃんを描き分けたといえます。魅力あふれる子どもの姿を描いたちひろの作品は、没後46年を経た今でも、多くの人々の心のなかに生き、愛され続けています。

本展では、ちひろの代表作の他、絵本『おにたのぼうし』や『おやゆび姫』『戦火のなかの子どもたち』など、精巧な画像表現により再現された「ピエゾグラフ」約100点を展示し、ちひろの画業の全貌を紹介します。

子どものしあわせと平和を願い、描き続けたちひろの世界をお楽しみください。

作家プロフィール

いわさき ちひろ

福井県武生（現・越前市）に生まれ、東京で育つ。東京府立第六高等女学校卒。藤原行成流の書を学び、絵は岡田三郎助、中谷泰、丸木俊に師事。1950年、紙芝居「お母さんの話」を出版、文部大臣賞受賞。1956年、小学館児童文化賞、1961年、産経児童出版文化賞、1973年、『ことりのくるひ』（至光社）でポローニャ国際児童図書展グラフィック賞等を受賞。代表作に『おふろでちゃぷちゃぷ』（童心社）、『戦火のなかの子どもたち』（岩崎書店）などがある。



いわさき ちひろ
（1973年4月 54歳）

ピエゾグラフとは

ちひろ美術館では、2004年より、その時点での作品の風合いを後世に伝えていくため、原画をデジタル情報として記録し、保存していくアーカイブを続けています。同時に、そのデジタル情報をもとにして、「ピエゾグラフ」の制作も進めてきました。

ピエゾグラフとは、耐光性のある微小インクドットによる精巧な画像表現で、ちひろの繊細な水彩表現まで高度に再現しています。光に強いピエゾグラフは、ちひろの作品の公開の可能性を大きく広げました。

展覧会の構成

**第一章
絵本の仕事****ピエゾグラフ約100点で迎える
「いわさきちひろの画業の全貌」**

ちひろは画家を志した当初から、より多くの人に楽しんでもらえる絵を描きたいと印刷美術の世界に進んだ画家でした。日本で盛んに絵本が出版されはじめた1950年代半ばから絵本を描き始め、60年代半ばには新しい独自の絵本の制作に情熱を傾けるなど、40冊余りの絵本を発表しています。

本章では、最初に手がけた『ひとりのできるよ』（福音館書店）から、物語絵本『おにたのぼうし』（ポプラ社）、新境地を目指して挑んだ『あめのひのおるすばん』、生前最後に完成させた『戦火のなかの子どもたち』まで、ちひろの絵本の仕事を紹介します。

**第二章
平和への祈り**

第二次世界大戦中に青春時代を過ごしたちひろは、悲惨な現実を目の当たりにしました。この戦争体験は、後の人生を決定付けるものとなります。その憤りや悲しみ、そして平和への願いを、ちひろは絵本という形で表現しました。本章では、ちひろが戦争をテーマに描いた3冊の絵本と、命の輝きを感じるあかちゃんの本を紹介します。画家として、人として、母として、「世界中のこどもみんなに 平和と しあわせを」と願い続けた、ちひろの平和への思いを浮き彫りにします。

**第三章
ちひろの歩み**

幼いころから絵が大好きだったちひろは、14歳のときから洋画家・岡田三郎助のもとで、デッサン、油絵を学び始めます。青春時代に戦争を経験し、両親の郷里・信州（長野県）で終戦を迎えたちひろは、翌年の1946年、27歳で画家を目指して単身上京します。

本章では、終戦直後の自画像や、画家として立つきっかけとなった紙芝居「お母さんの話」の習作のほか、絵雑誌の作品などを展示し、1945年から1960年代なかばまでのちひろの歩みを紹介します。

**第四章
季節のなかの
子どもたち**

ちひろは、絵雑誌や絵本のほか、雑誌の表紙絵や広告、カレンダーの仕事も手が掛けていました。これらの作品からは、ちひろ代表作が多く生まれています。

本章では、四季折々の風景のなかに子どもたちの姿をとらえた作品や、無垢なあかちゃんを描いた作品など、「母性の画家」とも呼ばれたちひろの後期の作品群を紹介します。

報道・広告用画像

画像1～4を報道・広告用に限りご提供いたします。ご希望の方は下記の使用条件をお読みの上、酒田市美術館までお問合せください。なお、広告用画像は本展覧会に関する情報掲載以外の目的に使用することは出来ません。(個人のブログへの掲載や鑑賞等を目的とする場合にはご提供できません。)

[使用条件]

- ①報道・広告用画像掲載には、必ずキャプション(作品名・制作年等)が必要です。画像下部のキャプションを記載ください。
 - ②トリミング・文字載せはご遠慮ください。
 - ③情報確認のため、お手数ですが、校正データを酒田市美術館までお送りください。
- 以上、ご理解・ご協力のほど、何卒宜しくお願い致します。

1



「ちら ちら こゆき」1958年

2



緑の風のなかの少女 1972年

3



春の花と子どもたち 1965年ころ

4



麦わら帽子をかぶったおにた 『おにたのぼうし』
(ポプラ社)より 1969年